

ダンス授業における受講生の 気づきに関する研究

天理大学 塚本 順子
東洋英和女学院大学 西 洋子
大阪女学院大学 原田 純子

1. 研究目的

ダンス授業において、学習の成果は目に見えるかたちであらわれてくるものだけでなく、自分自身の内面に気づいたり、活動に達成感を感じたりすることも重要である。学習者はその活動において、どのようなことに気づいたり、理解したりしているのかを明らかにすることは、指導者にとって指導のポイントをつかむことやダンス学習の有効性を確認することにもつながる。

本研究では、ダンス授業における受講生がどのようなことに気づき、また経験を重ねることによるその変化、そしてそれらの関係性を明らかにすることが目的である。

2. 研究方法

(1) 対象とした授業及び受講生

2006年 4月～7月年

体育学専攻学生 65名(男子1名・女子64名)

スポーツ方法1(ダンス) A・B 90分×11回

表1. 授業内容

1	オリエンテーション	7	小道具を使って・ゴム
2	からだはどう動く	8	ジャングルに降る雨
3	新聞紙	9	作品づくり
4	走一止	10	作品づくり
5	走一跳一転	11	発表会・ビデオ鑑賞
6	スポーツ名場面集		

(2) アンケートの内容

ダンス授業における活動を評価するために、先の研究で作成した23項目よりなるアンケートを実施した。内容はダンス学習の中核となる〈動き・イメージ・表現・コミュニケーション〉の4因子に対して、〈発見・広がり・深まり・共有(楽しさ)〉の4つの観点を掛け合わせた17項目に加え、授業を評価する6項目から編成した。それらは全て、「5.非常にそう思う」から「1.全くそう思わない」の5段階で評定を求めた。

表2. アンケートの17項目の観点

	発見	広がり	深まり	共有
動き	1	2	3	4
イメージ	5	6	7	8
表現	9	10	11	12
コミュニケーション	13・14	15	16	17

(当日項目内容資料提示)

(3) 結果の処理

ダンス授業を通して、受講生にどのような気づきがあるのかを検討する為、2回と11回の授業後に実施した上記のアンケートを、SPSS12.0Jによる階層クラスター分析を用いて、相互に類似した変数を分類し比較・検証した。

3. 結果

(1) 階層クラスター分析(当日資料提示)

① 2回目の授業受講後のアンケートの17項目についてのデンドログラムからの検証

2回目の授業受講後の17項目についてのデンドログラムから、その関係性の強さによっておおよそ3グループに分かれことがわかった。中でも<3.動きの深まり>は、受講生には<7.イメージの深まり>や<6.イメージの広がり>、<5.イメージの発見>が近く、ついで<2.動きの広がり>が続くことから、2回の授業を受講後の受講生には、イメージが動きの広がりや深まりに大きくかかわっていると受け止められていることがわかった。

② 11回目の授業受講後のアンケートの17項目についてのデンドログラムからの検証

11回の授業受講後の17項目についてのデンドログラムからは、2回目の授業後と同様に、<2.動きの広がり>や<3.動きの深まり>は<6.イメージの広がり>や<7.イメージの深まり>に近く、動きの広がりや深まりにイメージがかかわっていると感じられていることがわかった。また、動き・イメージ・表現の共有とコミュニケーションに関わるものがまとまりをなしているが、<1.動きの発見>についてはそれらに近く、受講生には受けとめられていることがわかった。

4. まとめ

本研究では、以下のことが示唆された。

- ① 初期には自己や他者も含め色々な要素が混沌としているがダンス学習が進むと、他者との関わりについてのものと、自分の内的なものにかかわるものとが明確に分かれて意識されるようになる。
- ② 「動きの発見」は学習が進んだ段階になると、コミュニケーションや共有の中にあることから、学習というダイナミックな活動の中で色々な他者とかかわりながらできてくる。
- ③ 「イメージの発見」については、初めは動きあるいはイメージと単独で感じられているものが、学習が進むとイメージと動きの両方を内包した表現というものに一体化して感じられている。